

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：32632

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00148

研究課題名（和文）奇瑞の表象としての仏像制作に関する研究

研究課題名（英文）Research on Buddhist image production as a representation of miracles

研究代表者

佐々木 守俊（SASAKI, MORITOSHI）

清泉女子大学・文学部・教授

研究者番号：00713885

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では奇瑞の発生を契機とする仏像制作、そして像に対する社会の認識を理解することを目標に作例と史料を収集し、特に過去に存在した霊像の記憶が後世の造像に及ぼした影響を考察した。鎌倉時代再興の宝積寺十一面観音立像については、当初像が9世紀の作で架橋の奇瑞を示した霊像とみなされていたことに注目し、霊像の求心力によって結縁者が集結する場が形成されたことの意義を検証した。浄瑠璃寺吉祥天立像については、夢中の示現を記す経典が造像の思想的背景となったこと、先行する霊像が典拠とされたことを指摘した。また、夢告を契機とする造像の事例を収集し、霊像の成立にあたって夢が果たす機能を汎アジア的観点から考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は「奇なる存在としての仏像はなぜ、どのような人々によって必要とされたのか」という問いのもと、作品と史料を総合的に検証した点にある。仏像が起こす奇瑞を記した史料や、生動感を表現した仏像に関する研究は豊富に蓄積されてきた。一方、奇瑞の発生（またはその期待）を契機とする造像の実態ははまだ考察の余地を残す。本研究では奇瑞を表象するために図像や表現、荘厳の方法がどのように選択されたかに注目した結果、霊像の再興・夢中の示現の表象化・像内納入品による霊性の付与などの問題について知見を得ることができた。この考察は仏像生成の場における奇瑞の意義、そして霊像を必要とした受容層の様相にも及ぶものである。

研究成果の概要（英文）：This study collected information on Buddhist statues and historical materials for understanding the image creation triggered by the occurrence of miracles and society's perception of statues. In particular, it was considered that memories of mysterious statues of the past affected the later image creation. On the 11-faced Kannon statue of Hoshakuji Temple that was rebuilt in the Kamakura period, this study noted that the original statue was created in the 9th century and was considered a mystical statue that built the bridge, and verified its significance of formation of place where connected people gather. On the Kichijoten statue of Joruriji Temple, it was pointed out that the sutra that recorded visions in dreams was the background for the image creation, and that statues of the past served as models. And this study collected examples of statue creation triggered by dream confessions, and considered the function that dreams played in creating images from a pan-Asian perspective.

研究分野：日本美術史

キーワード：仏像 奇瑞 仏教説話 像内納入品 仏教版画 夢告 観音菩薩 吉祥天

### 1. 研究開始当初の背景

従来の研究では、仏像の生きているかのような動きや発声、放光、流血などを語る各種の仏教説話が注目され、それらの記述は仏像の生身性や迫真性の表現と関連づけて論じられてきた。そうした研究の過程で、既存の仏像が奇瑞を起こすのではなく、むしろ奇瑞の発生に起因して造像の機運が生じたり、奇瑞発生への期待を籠めて仏像が造られる現象も注目されることはあったが、いまだ考究の余地を多く残している。説話にみるほとけの功德にもとづき、あるいは夢告や社会の言説を契機に造像がおこなわれた事例は少なからず指摘が可能で、そこでは奇瑞への期待を表象するという目的のもと、図像や表現、荘嚴の方法が選択され、テキストとイメージの統合による霊像の具現化が図られてきた事実が、実作例と諸史料の詳細な照合から考証可能であると予測された。

そこで本研究では上記の学術的背景をふまえ、「奇なる存在としての仏像はなぜ、どのような受容層によって必要とされたのか」という問いを立て、具体的な作品の検証をおこなうこととした。

### 2. 研究の目的

本研究では、それぞれの作例の造像当時のコンテクストを復元し、それにとまなう造形(図像、表現)の必然性を明らかにすることを目的とした。方法としては、①彫刻史研究と絵画史研究(版画史研究を含む)の成果を積極的に統合すること、②従来はあまり使用されてこなかった唐・宋代のものを含む史料群に目配りし、汎アジア的な観点から奇瑞と造形の問題を考察することを特色とする。以上の考察を通じ、仏像生成の場における奇瑞の意味、さらに奇瑞の表象としての仏像の存在意義を浮かび上がらせることができ、平安・鎌倉時代の社会における仏像の位置づけ、さらには仏像の受容層の実態を具体的に把握することをめざした。

### 3. 研究の方法

平安・鎌倉時代における奇瑞への認識と造像の関係を、特に靈験譚を前提とする造像、および夢告を契機とする造像に注目して考察するため、調査対象作品を選択した。作品は彫像に加えて像内納入品、そして絵画作品にも目配りし、これらを生み出した信仰の存在を顕在化する試みをおこなった。また、作品研究と並行して説話、密教事相書、日記、寺院史料、また中国の往生伝や僧伝など、これまで美術史研究と関連づけられることの少なかった史料の検出に努め、隣接分野(文学研究・歴史研究・寺院史研究など)の研究成果にも注目しながら、作品研究のみからは得られない仏像に関する当時の認識を考察することで、奇瑞の発生を契機とする仏像生成のメカニズムを検証した。

### 4. 研究成果

#### (1) 宝積寺十一面観音菩薩立像

寺の草創と造像にあたって重要な信仰背景になった可能性が非常に高い、山崎橋の架設にまつわる説話を分析した。同時に、聖なる存在による奇跡的な架橋をものがたる南北朝～宋代の志怪などの中国の説話や史料を多く収集・分析し、山崎架橋説話との比較をおこなった。その結果、山崎架橋説話は中国説話の延長線上に位置づけられるとの見通しが立ち、鎌倉時代の再興造像においても像にまつわる説話性、すなわち「架橋の奇瑞を起こした観音」という性格設定が大きな意味を持っていた可能性が浮かび上がった。文学研究・歴史学研究の分野ではこれまでも橋の境界性がしばしば論じられてきたが、美術史研究の分野ではこうした研究成果はあまり注目されることがなかった。それは架橋の主体としての聖なる存在や、架橋と仏像の関係が議論の俎上に上ることが少なかったことが一因と思われるが、本研究では北魏の『水経注』や唐の『建康実録』など、山崎架橋説話の中国における先例と位置づけうる有益な情報が確認され、宝積寺像の汎アジア性という議論の立脚点を見出すことができた。並行して、宝積寺の所在する京都府山崎の地を実査し、山崎橋・山崎廃寺・山崎津など像の成立と関連する施設跡の位置や現状、隣接する大阪府水無瀬と位置関係を確認した。さらに、河崎観音の通称で知られる感応寺の観音菩薩立像(現在、九州国立博物館蔵)を核とする法華三十講の事例や、法楽連歌の主催と地藏菩薩像の造立に関する『民経記』の記事を参照し、13世紀第二四半世紀において奇瑞の発生や靈験譚が勧進の推進力として重視されていた形跡を指摘した。以上の知見は「宝積寺十一面観音菩薩立像の再興」として口頭発表した。今後は論文化と学術雑誌への投稿を進める予定である。

#### (2) 浄瑠璃寺吉祥天立像

吉祥天は奇瑞との関係が深い尊格であるとの見解が得られたことから、その代表的作例である浄瑠璃寺像に注目し、関連史料の収集に努めた。本像に関しては奈良時代以来の吉祥海過との関連が示唆されるとともに、天平復古や宋風受容といった観点からその表現が理解されてきたが、近年は鎌倉時代の南都で活躍した貞慶の関与が説かれ、一方では奈良時代以来の「唐美人」表現の一形態であるとの位置づけもおこなわれ、研究は新たな段階に入りつつある。本研究では

南都における吉祥天信仰の様相をものがたる史料を収集し、そこに見られる奇瑞への言及や光明皇后の信仰に遡及する意識を確認することができた。『讚仏乗抄』所収の表白などの解釈を通じ、動性の表現は『金光明最勝王経』の説く夢中での吉祥天の示現の造形化と理解できること、面貌表現や着衣の表現は「宋風唐美人」を意識した可能性があることを指摘した。以上の知見は論文「浄瑠璃寺吉祥天立像の「宋風」として公表した。

これとともに、浄瑠璃寺および町田市立国際版画美術館に所蔵される像内納入品の版本吉祥天像全点を調査し、従来は1種類とみられていた印影が実際には4種類であること、4種類の像を縦に並べた細長い版木が使用されていたことをあきらかにした。また、本納入品はこれまで技術的には印捺による「印仏」であるとされてきたが、実際には摺写による「摺仏」とみなしうる可能性を検証した。以上の知見は論文「浄瑠璃寺吉祥天立像の納入摺仏について」として公表した。

### (3) 小仏像を像内納入する仏像

小仏像を別の仏像の内部に納入する作例、またそれをものがたる史料は多く残されており、霊験像を保護する目的に加え、像内に小像をおさめることで仏像に特別な意味を持たせる信仰の存在が想定されたため、事例を収集するなかで特に地藏菩薩像の事例に注目した。まず、北宋初期の『地藏菩薩応驗記』の検証をおこない、像と奇瑞の関係を語る話型を分類し、他の地藏霊験譚のタイプ分類への応用を試みた。このほか大量の地藏の小像を並べたり、大きな像の内部に納入する千体地藏の情報収集とその検証をおこない、特に寂光院像など小像を像内納入するタイプについては『地藏菩薩本願経』に説く地藏の「分身」の結集・一体化とみなされる可能性を指摘した。以上の知見は論文「新造された小仏像の像内納入について」として公表した。

### (4) 夢告を契機とする造像

吉祥天が夢中に示現して行者の願望を叶える尊格であることが『金光明最勝王経』に説かれることや、『地藏菩薩応驗記』に夢と地藏菩薩像のかかわりをものがたる説話が複数見出されることに注目し、夢告を契機とする事例を実作例と史料の双方にわたって収集・分析した。その結果、比較的好く知られた造像の事例に加え、夢告によって仏像が発見された事例や、その像を納入して保護するために別の像（いわゆる「鞘仏」）が造像された事例、また仏像が夢告を通じて現状変更（尊格の変更、破損個所の修理など）をせまる事例など、夢告と造像にまつわる言説の多様性を確認した。加えて、鎌倉時代の作例のうち、造像銘記に夢告に関する記述をもつ事例を収集し、諸史料との比較をおこなった。以上の知見は科研報告書所収論文「夢告による造像について」として公表した。

本研究のおもな成果は上記4点だが、一連の調査・考察を通じ、霊験像が再興されるメカニズムの検証というあらたな問題が見出された。今後はこの観点のもと、研究を継続してゆく所存である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐々木守俊	4. 巻 70
2. 論文標題 新造された小仏像の像内納入について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 清泉女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24743/00001470	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐々木守俊	4. 巻 10
2. 論文標題 浄瑠璃寺吉祥天立像の納入摺仏について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 パラゴネ	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐々木守俊
2. 発表標題 宝積寺十一面観音菩薩立像の再興
3. 学会等名 美術史学会東支部例会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 宮治昭・肥田路美・板倉聖哲・佐々木守俊ほか	4. 発行年 2023年
2. 出版社 中央公論美術出版	5. 総ページ数 693
3. 書名 アジア仏教美術論集 東アジア7 アジアの中の日本	

1. 著者名 佐々木守俊	4. 発行年 2024年
2. 出版社 佐々木守俊（科研報告書）	5. 総ページ数 40
3. 書名 奇瑞の表象としての仏像制作に関する研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------